

家政学部 生活環境学科 小論文問題

下記の文章を読んで、次の問いに答えなさい。

- ①「洋服の墓場」がなぜできたのか、150～200字で説明しなさい。
- ②今後どのようにすべきか、あなたの考えを600字以内で述べなさい。

南米チリの砂漠に、「洋服の墓場」と呼ばれる場所がある。各国のアパレルブランドの服が捨てられ、山のように積み上がっているからだ。大量生産・大量消費社会が生んだ大量の売れ残りや古着が、南米の砂漠に押しつけられている。

チリ北部のアンデス山脈に沿って、南北に1千キロにわたって延びるアタカマ砂漠。砂漠の中にある居住地域を車で抜けると、あたり一面に洋服や靴、バッグなどが捨てられた異様な光景が目に見え、飛び込んでくる。近くで見ると、スペインのブランド「ZARA(ザラ)」や中国発のネット通販「SHEIN(シーイン)」などの服だ。燃やされた衣類の黒い灰が風で舞い、プラスチックの焦げたような臭いが漂う。衣類のリサイクルを広める地元NGO「洋服を着た砂漠」の共同設立者、ジャンカルラ・サンブラーナさん(31)は「こんな場所があちこちにある。2022年時点で、砂漠に捨てられた服は推計4万トン。世界から、いらぬ服が送られてくる」と肩をすくめる。

車で約30分の場所にあるイキケ港は、関税が免除される自由貿易港だ。経済の活性化を図るため、1970年代に政府が自由貿易地域に指定した。衛生面や環境保護を理由に、他国が古着の輸入を禁止する一方、チリは世界有数の古着輸入国となった。年間4万～6万トンの売れ残りや古着が、欧米などからたどり着く。多くは価値のない、よれよれの服だ。

サンブラーナさんによると、衣類を処分するには、廃棄物処理業者にお金を払う必要がある。近くまで車道が通るアタカマ砂漠は、不法投棄がしやすい。みつからないように、砂漠で衣類を燃やす人も多い。「有毒ガスが住宅の中に入り込んで、大気汚染も深刻。地元住民は被害を受けている」とサンブラーナさんは訴える。グーグルアースの衛星画像で確認すると、2007年には何もなかったが、25年には捨てられた服や、燃やされた跡が広範囲に広がっていた。

近くの青空市場では様々な衣類が約70円から売られていた。販売者のボリビア人、ジェリー・マナグエルさん(38)は、「日本の洋服も見たことがある」と話す。販売する洋服は、イキケ港の近

くで入手する。45キロを150ドル(約2万円)で購入し、「売れ残った服は、砂漠に運んで燃やす」。地元の自治体は対策に頭を抱える。アルトオスピシオ市の環境部長、エドガー・オルテガさん(36)によると、不法投棄を取り締まるため、220台の監視カメラを設置。去年は400件を超える違反に罰金を科したが、「限界がある」と話す。オルテガさんは、「自由貿易港のおかげで雇用が増えた」と評価した一方で、「イキケに着く衣類の2〜3割は砂漠に捨てられる。我々は、価値のない服の処理を押しつけられている」と指摘する。

環境問題が専門の弁護士のパウリン・シルバさん(37)はファストファッションの台頭で、生産サイクルが短くなった点を原因に挙げる。「新シーズンの服が次々生産され、外国で不要になった服が、ここに送りつけられ、売り物になる服だけ選別された後、捨てられている」。シルバさんは「私が子どもの頃は、良質な衣類が届き、昼過ぎには売り切れていた。今は質の悪い衣類が当時の10倍から30倍も、届くようになった」と嘆く。

世界経済フォーラムの報告書などによると、2000年から14年にかけて、世界の衣類の生産量は倍増し、年間1千億着を超えた。一方で、着用期間は半分になったという。化学物質が使われた服の廃棄は、環境への負荷も大きい。国連のグテーレス事務総長は今年3月の「ごみゼロ国際デー」で、「地球はファッションの犠牲者だ」と訴えた。アタカマ砂漠のほかアフリカのガーナや、インドなどでも、大量の洋服が放棄され、問題になっている。シルバさんは言う。「これは世界的な現象。資本主義におけるファストファッションの台頭で、必要以上の服が世界にあふれている」。

2025年5月26日 朝日新聞朝刊より転記

<https://xsearch.asahi.com/kiji/detail/?1762507268708>

承諾番号 ic-0037